



1978年 福島第一原発事故隠蔽

1978年11月2日東京電力福島第一核電廠3號機發生稼働危機

東京電力福島第一核電廠發生過7個半小時的稼働問題，這在事故發生29年後，2007年3月22日被告發，而東京電力主張「當時並無需要跟大眾報告的義務」。而其它的核電廠也發生過同樣的稼働危機，已被發現的至少就有6件。

福島第一核電廠在1990年9月9日3號機還發生自動停機事故。1998年2月22日4號機在定期檢查時137根控制棒中有34根脫落50分鐘之久，脫落程度為整體的25分之一。2010年6月17日2號機緊急自動停止，另外2011年3月11日爐心熔解、Revel等大事故，即使是這樣的慣犯卻仍被放任。

自淨能力の欠如露呈

発電所不正点検

原発政策や経営に

2012年12月7日放射線影響研究所（原ABCC）發表「黒雨」和導致癌症沒有關聯。

放射線分析原子彈爆發後，淋到降下含有放射性物質的「黒雨」的人約13000人的數據後，判斷黒雨和癌症之間沒有關聯性。為什麼在原子彈爆發後的67年後，福島核災發生1年9個月後的此時進行這項發表呢？

黒い雨ががんリスク否定

広島市長 被爆者1万3000人解析

放射線影響研究所（原ABCC）は、原子力被害救済財団（ABCC）の委託で、広島市に降った「黒い雨」の被害者約1万3000人の健康状態を調査し、がんの発症率と放射線被曝量の関係について、最新の科学的データを公表した。調査の結果、黒い雨の被害者とがんの発症率には明確な関連性は見られなかった。これは、黒い雨の被害者が、原子力被害救済財団（ABCC）の調査で、がんの発症率と放射線被曝量の関係について、最新の科学的データを公表した。調査の結果、黒い雨の被害者とがんの発症率には明確な関連性は見られなかった。

福島県 子の放射能尿検査せず

秘密裏に「困難」結論？

健康調査の検討

福島・小児甲状腺がん 募る不信

別の検査結果

健康調査の検討

2012年10月25日福島県民健康権利調査委員会(山下俊一委員長)提出「不進行尿検査」の方針

經由尿検査をすることで体内にどれくらい放射線被曝したかを調べる。尿検査の結果を元に、健康問題の発生を判断する。福島県政府は、尿検査の結果を元に、健康問題の発生を判断する。福島県政府は、尿検査の結果を元に、健康問題の発生を判断する。

車諾比核電廠4號爐爆炸 (1986.4.26~)

死者数...推定数百人~数十万人

福島第一核電廠 (2011.3.11~)

死者数...現在 0人？

2011年12月、「食道癌」

2012年11月26日、脳出血。

2013年7月9日、死去(享年58歳)。

福島第一原子力発電所 所長 吉田昌郎

放射線被曝はくどの因果関係は考えにくい

作業員約800人死亡？

被ばくでの食道がん発症は5年程度 → 放射線被ばく原因と考えにくいと説明

放射線影響研究所（元ABCC）、日本甲状腺学会、福島県、日本政府、都説「100mSv/year完全没问题」

放射線影響研究所（簡稱放影研）

1957年7月1日設立了。主要的任務是「研究關於放射線健康危害」等，但卻在研究目的上標明為「放射線的醫學使用」。2001年變更為文部科學省之下的獨立行政法人機構。不論是第五福龍丸的對應，甚或之後的核能電廠建設等的推進都是日本的國家政策。

放射線影響研究所（簡稱放影研）

1974年12月27日美兩國政府再次改編ABCC（原爆傷害調查委員會），讓其改組為日美兩國共同的組織。1975年設立「放射線影響研究所」。原冷戰下由ABCC所負責的任務告一段落，接下來開始日美共同核能源開發與日美軍事同盟的摸索期。

